

芥川は面白い！

内藤真理子

『芥川龍之介全集』を読んでいる。全集は、ほぼ年代順になっている。どれもが短編、中編で、面白くスイスイ読め、流行作家の苦闘も窺える。現在、第四巻目。

『桃太郎』が出てきた。そう言えば『蜘蛛の糸』や、『猿蟹合戦』のような民話を題材にしたものも多々ある。

読み始めると、この桃は天地開闢の頃からあって、一万年に一度花を開き実をつけたもので、八咫鳥がその実を啄ばみ川に落とし人間のいる国に流れ着いた。そこに、日本中の子供が知つての通り、お婆さんが一人、柴刈りに行つたお爺さんの着物か何かを洗っていたのである。で、始まる。

桃から生まれた桃太郎は、鬼ヶ島の征伐を思い立つ。その訳はというと、彼はお爺さんやお婆さんのように山や畑へ仕事に出るのが嫌だった。征伐話を聞いた老人夫婦は、内心この腕白ものに愛想をつかしていた時だったので、一刻も早く追い出そうと、旗や太刀、陣羽織などいいなりに持たせ、途中の兵糧には桃太郎の注文通り、きびだんごを持たせてやった。

それからは、誰もが知っているシナリオ通り、犬、猿、雉を家来にするのだが、桃太郎はケチで、やり手で、家来に黍団子を半分ずつしか与えない。家来たちはそれぞれ性格が悪く、お互いを馬鹿にしあい、喧嘩をし、挙句の果て、黍団子半分では鬼ヶ島征伐は考え物だと言いつつ始末。

そこで桃太郎「供をしなくても良いけど、鬼ヶ島を征伐しても宝物は一つもやらないぞ」と、欲心を刺激して鬼ヶ島征伐を果たす。

ここまで読んだだけでも、弱きを助け強きを挫く、良い子のための童話とは趣を異にするコメディ―仕立てで充分楽しめるのだが、鬼ヶ島に行くと更に読み手を楽しませてくれる。

鬼ヶ島は絶海の孤島で、ヤシが生え、極楽鳥のさえざりが聞こえる美しい天然の楽土である。鬼はあくまで弱く、優しく、乱暴な人間を恐れている。

桃太郎は威丈高に

「鬼ヶ島の宝物は残らず献上するのだ！」

「はーあ、そうします」と、鬼の酋長。

そんな馬鹿な！

(806字)